

まんになる場合などがあり、個人差の問題はゆるがせにできない。

日・米・独の小児の發育の比較からみたわが国の小児の發育向上に関する指針

お茶の水女子大学 平井信義

千羽喜代子

1、序文

欧米人の体位と日本人の体位を比較すると、そこにはかなりの違いのあることは既知のところであり、その違いがどのような具体的な事柄としてあらわれているかについては、多くの研究がなされている。そこで、その違いが何歳ごろに現われるのか年令的にしぼってみると、船川、平井、峯川の諸氏はいずれも幼児期にそのきざしがあらわれると報告している。そこで私どもはさらにそれを確認するため、①その違いのあらわれる年齢の考察を試みると同時に②幼児期に違いがあるとすればそれは身体の中の部分に現われるのか、均衡 (Proportion) の比較を、③ついで、Proportion に違いがあるならば、それはいかなる要因に基づいているのか、これら各項目につき、日・米・独三国の文献による比較考察を試みた。

2、研究資料

アメリカ——一九三〇年から一九四六年までの Iowa 州における調査

ドイツ——一九二七年、一九三二年、一九四七年の Hambruge

における三〇万人以上の平均値

日本——昭和二五年度補正、国立公衆衛生院による統計値

(一九五〇年)

その他 Simmons, K. 佐野氏、小泉氏、豊田氏の調査を前記の資料に補った。

3、総括

a 身長、体重の比較

身長、体重ともに累積増加率を算出し、その比較を行った。

(I) 身長、米と独の身体發育は全体を通じて米が平均男児四・八% 女児二・〇% 凌駕している。しかし、日は独に比べて平均一四~一五% 劣っている。これをさらに年間増加率によって比較すると、この違いの著しくあらわれるのは一歳~三歳であり、三歳~六歳がこれにつづく。六歳~十一歳はほぼ一致の値を示している。身長の發育の違いが幼児期前期にあらわれること、とくに二歳が著しく、独・米のまゝの増加を示すにすぎない。青年期のとくに女子が各国によってその増加率に違いのあることを附記しておく。

(II) 体重 米は独よりも男児五・五%、女児二・四% 優っている。

しかるに日は独よりも一二~一四%の低下を示す。年間増加率独・日の比較をすると、身長ほど著しくはないが、この違いの大きくあらわれているのは、男児九~一二歳、一二~一五歳、女児六~九歳、九~一二歳であった。

b 体型の比較

Kaup 指数により比較すると、独・米では一歳では体重が身長に比べてまざり、三歳～六歳では、逆に身長が体重に優つているといえる。その後は漸次身長に比べて体重が増加する傾向は強度になつてくる。それに比べて(日)は、そのような年令的にはつきりした段階があらわれていない。一歳から一二歳まで Kaup 指数はあまり大きな変化がなく、一三歳頃から体重が身長にまさつてくる傾向がみられる。

c. Proportion の比較。

発育の違いのあらわれるのがほぼ二歳頃であるという結果を得たので、さらに検討をするため長軸の発育の比較を試みた。全頭長は、全期を通じて(日)が優っている。下肢長(身長—坐高)は二歳までは、ほぼ等しいが若干(日)が長いくらいであるが、三歳になるとその関係は逆になる。以後同じ傾向をたどる。長胴短脚のきざしは二～三歳頃からみられる。一二歳頃が日本人の長胴短脚をきめる最後の発達段階であるという説もあるが、今回の調査では認められなかった。さらに、下肢長の各部分、大腿、下腿、足高、いずれの部分かどのように発育するのか、その年令による増加傾向は今後の問題としたい。大山氏は、坐高の発育は比較的外的生活条件には影響されないが、下肢長はかなり影響されると報告している。わが国の乳幼児の下肢長に関する研究は僅少であるが、長軸発育にあつて見落せない問題である。

d. 食餌摂取量の比較

身体発育、体型および下肢長の相異を作り出している要因としては、民族差・風土的影響さらに栄養・養護・運動量など種々の要因が考えられるが、それらを比較しうる資料が少ない。栄養についてのみ附随的に報告する。栄養の問題についても同様に、子どもを対

象とした調査が僅少である。したがって大人の摂取量より類推する。独・米・日の一人一日当り摂取食糧構成を比較すると、(日)の肉類・乳類の摂取量は彼らの $\frac{1}{10}$ ～ $\frac{1}{30}$ であり、油脂・卵類は約 $\frac{1}{10}$ 程度である。魚類の摂取がわずかに二～三倍であるのみで、総蛋白および動物性蛋白・脂肪の摂取量には大きな違いのあることが判る。炭水化物の摂取量に若干(日)が多い。ビタミンおよびカルシウムも問題となるところであるが、それらに関する資料がない。

なお、本研究はお茶の水女子大学山中加代子との協同研究である。

健康観察結果の処理について

大内保育園 藤 本 千 代

幼い子どもたちが、常に健康を保ち、よりよい成長をとげるためには、適切な健康観察結果の処理が、必要であることは、よく理解しているながら、それでは、どのような方法で、これを行えばよいかと、いうことになる。朝早くから夕方おそくまで、寸暇もない保育という仕事の中で、実際にできる程度で、しかもよい方法が、なかなか立案できないことを、私は、常々残念に思っているものである。

ここでは、健康観察の経過についてのべます。

一、成長発達についての観察(身体測定)